



みのる法律事務所便り
令和6年5月第 409号



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL:0191-23-8960
FAX:0191-23-8950

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句

163



前号で 誰もいない 土地と家



とたん あや
述べた途端の 空き家報道

令和6(2024)年5月1日
あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

前号では、「田舎では 誰もいない 土地と家 円満相続の 妨げとなる」、「どうしよう 誰もいない 土地と家 脳ミ絞(しぼ)り 円満相続」という駄弁句を詠みました。

こんな駄弁句が報道機関の目に止まるなどとは考えられませんが、令和6(2024)年5月1日の各紙は、いっせいに「空き家問題」を大きく報道しました。タイミングがバッチリです。この事務所便りの方が報道機関より先取りしたような気がして、悪い気はしません。

調子に乗って、令和6(2024)年5月号の事務所便り『的外』第409号では「空き家問題」について述べてみることにしました。人口が減少すれば住む人が減るので、空き家が出るのは当たり前です。

少子高齢化が進み、若者は都会へ、老人は施設へ入る田舎においては、古い大きな家はいらな(いな)いだけでなくお荷物です。空き家はこの先一気に増えそうです。

田舎の誰も住むことのなくなった大きな家は、どうなっていくのでしょうか。終戦後しばらくの間、小さな家に一族4家族16人で暮らしたことのある身としては、「はなはだしく時代が変わった」という隔世(かくせい)の感が湧いてきます。

あの頃と比べたら日本は豊か(ゆた)かになったというか、ゆとりができたとも言えるのでしょうか。戦中・戦後の生活苦を知る身としては感無量(かんむりよう)です。何だか分かりませんが涙(なみだ)が出てきます。

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 (164)

脳ミソを ^{しば}絞ってみても ^う浮かばない

生き方変えて 楽しむのみぞ



令和6(2024)年5月1日
あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

「空き家問題」を指摘し、その解決方法を考えてみました。ない脳ミソを絞ってみました。もともと浅学非才の身です。妙案は浮かびません。

諦めました。空き家問題の解決方法は断念することにしました。空き家が増えていくことは、当分の間は仕方がないと思います。時間が経てば、空き家も物ですから、朽ちて、なくなっていくでしょう。

空き家問題を、どのように解決したらよいかなどという後ろ向き^きの考え方を切り替えて、人口減少、少子高齢化社会をどのようにして楽しんだらよいかという前向きな生き方をした方がよいという思いに至りました。

人口が減り、満員電車でギューギュー詰めにされることもなく、若い者に押されたり、引っ張られたり、振り回されたりしない豊かでゆったりした老人生活を送れる老人のパラダイスを田舎に創り出す方法を見付け出すことに考え方を考えることにしました。

「豊か」とは、「ゆったりとして、満ちたりているようす。めぐまれているようす」、「のびのびとして、ゆとりがあるようす。おおらかなようす」です。「パラダイス」とは、「楽しさの満ちあふれている楽園」、「天国」です。

ゴミゴミしていない、ゆったりした空間の田舎で、人生100年時代の年寄り生活を楽しむ方法を考えることは、空き家問題で脳ミソを絞って苦しむよりワクワクしずっと楽しめそうです。

誰もいない遺産と空き家 —問題の所在と解決方法—



令和6(2024)年5月1日付の各紙は、空き家について一斉に報じています。毎日、目を通して新聞は、朝日新聞、読売新聞、岩手日報、岩手日日、三陸新報などの各地方紙ですが、そのほとんどが「空き家」について大きく取り上げていました。その見出しだけ見ても、空き家問題は深刻な状況となっているようです。既にお読みのこととは思いますが、各紙の見出しを転載します。

見出しだけ見ても大変な問題であることと、その解決の難しさが分かる気がするのです。この事務所便りの先月号では「誰もいない遺産問題」を取り上げましたが、「空き家問題」と「誰もいない遺産問題」には共通性がありそうです。どちらもいない土地・建物が世の中には沢山あって、それをどうしたらよいかという問題だということです。前号に続けてこの問題について述べてみます。

朝日新聞は3面で、メインタイトルは「空き家 最多900万戸」、サブタイトルは「5年で51万戸増 全住宅の13.8%」とし、更に「取り壊し・売却困難 高齢化で増加傾向」と掲載した上、経済面で「『相続した家どうする』先送り」、「『空き家税』導入の動きも」、「解体への支援 拡充が必要」とあります。問題の大きさと、その解決の難しさを語っています。個人がどうこういうレベルの問題ではなく、国家レベルの問題です。

読売新聞は1面トップに、メインタイトル「空き家900万戸30年で倍」、サブタイトル「昨年最多放置385万戸」とし、更に別面で「放置空き家深刻化」、「子が相続持て余す」、「災害復旧の妨げに」とあります。朝日新聞と同じように問題の大きさと、解決の難しさを強調しています。

中央紙のみならず、地元紙も報じています。岩手日報は、1面でメインタイトル「空き家率最高13.8%」、サブタイトル「900万戸、5年で51万戸増」とし、更に別面で「全国空き家率 過去最高」、「災害時 復興の壁に」、「国、自治体 税制で修繕促進」とあります。

岩手日日は、メインタイトル「空き家 最多900万戸」、サブタイトル「総務省30年で2倍、割合13.8%」とし、別面で「空き家 有効活用を推進」、「荒れた物件は安全対策」とあります。同紙は、地元岩手県の空き家率は2018(平成30)年は16.1%、2023(令和5)年は17.3%とあり、全国は2018年13.6%から2023年13.8%となっていると報じています。地元岩手県は全国平均より空き家率が高いことを指摘しています。



前号(令和6年4月、第408号)の『的外』で、「田舎では 誰もいらぬ 土地と家 円満相続の 妨げとなる」、「どうよう 誰もいらぬ 土地と家 脳ミソ絞(しぼ)り 円満相続」という駄弁句を掲載しました。反響がありました。誰もいらぬ遺産となっている土地・建物の処理に困っている人は少なくないのです。

この事務所便りをお読み下さっている不動産会社を長く、手広く経営している社長様から「先生のお詠みになった句の通りです。相続問題では、不動産管理が大変です。特に農地や山林の受取人がいらないため話し合いが進まず、円満相続の足枷あしかせとなっております。人口の減少と、農業のなり手が少ないことが大きな原因となっています。只今現在、先生に相談しなければならぬ案件を抱えています」というお手紙を頂戴しました。このような反響があることは、ものを書く者としては、一番嬉しいことなのです。この紙面を使い、この社長さんに御礼を申し述べさせていただきます。

当地方は、長い間農業や林業が中心でしたので、農地や山林が多く、この社長さんのお悩みは当地方の多くの人に共通する問題であることは、間違いありません。当地方は人口減少、少子高齢化が激しく、当地方に住む人は減少し続けています。住む人が少なくなっているのですから、住む家がいなくなるのは当然です。空き家が増えるのは当然です。

この問題を解決するには、人口減少を止め、少子高齢化を止めなければならないのです。その解決方法は地方の老弁護士がいくら脳ミソを絞っても考え付くようなレベルの話ではありません。ですから、人口減少や少子高齢化問題を解決する方法は語れません。この問題は人間の生き方が深く関わっていることです。人間の生き方は、人生を80年以上もやらせてもらっていますので、人間の生き方なら語れそうです。人口減少を止める方法は語れませんが、そのような現実を

前にして、どう生きたらよいかは語れそうです。

今、『円満相続をしてあげたいのです』シリーズの第1巻として『いま、特に解決してあげたい相続問題－誰もいない遺産－』を書いています。誰もいない遺産の代表は、被相続人が残してくれた土地・建物です。その一つに空き家問題があるのです。今回の報道により、「誰もいない遺産問題」と「空き家問題」は、当地方だけの問題ではなく、全国的な問題であることが分かりました。

その中でも、農地と山林は誰も引き取り手がなく、それが円満相続をさせてあげたいという田舎弁護士の願いを実現してあげる上で、障害となっています。そのことは、前述の通り、前号の駄弁句でも述べました。今回の空き家問題に関する各紙の報道は、「誰もいない遺産問題」と根は同じだと確信します。空き家問題がこれ程クローズアップされ、全国で報じられたのは、誰もいない遺産問題も当地方だけに限らずに、全国的な問題となっているということを意味していると確信します。

誰もいない遺産問題も、空き家問題も、問題の所在は親の残してくれた家は、それを相続する人にとっては持て余す、言わば「お荷物」となっているという点にあることは明らかです。問題の所在については容易に指摘できますが、この問題をどのようにしたら解決できるかという解決方法を見付け出すことは、容易なことではありません。

国や地方公共団体が知恵を絞り出しても、^{ぼっぼんてき}抜本的、つまり根本にさかのぼって原因を除去することはできていません。そのような難しい問題を解決する方法を見付け出すことなど、^{せんがくひさい}浅学非才の身ではとても考えつくことなどできません。ですが、54年間の弁護士経験に基づく経験則と全脳ミソを絞り出して、今やれる方法につき『円満相続をしてあげたいのです』シリーズという駄弁本シリーズの一冊として、『いま、特に解決してあげたい相続問題－誰もいない遺産－』という駄弁本を書いています。令和6(2024)年7月には発行できそうです。

そこには「誰もいない遺産」の問題、つまり「金は相続したいが、不動産は相続したくない」というクライアント(相談者、依頼者)の要求に^{こた}応える当面の方法を書きました。しかし「誰もいない遺産問題」、「空き家問題」を根本的に解決する

方法は、私^{わたしごと}如きに思い付くことなどできる筈がありません。現段階^{あきら}では、諦める他に手はありません。

そこで生まれたのが「脳ミソを絞ってみても浮かばない生き方を変えて楽しむのみぞ」という訳の分からない駄弁句です。「誰もいらぬ遺産」も「空き家」を受け容れて、「それはそれとして」、それを楽しむ生き方を考えてみた方がいいのではないかと居直^{いなお}ることにしたのです。

誰もいらぬ遺産である山林や農地や家や敷地^{しきち}のうち、誰もいらぬものはいらぬものとして受け容れて、そのいらぬものをどのように処分するか、処分したらその後をどのようにしてそれを活用して、楽しんだらよいかを考えた方がいいと思うようになりました。

つまり、誰もいらぬ山林や農地や家や敷地は、まわりの人の生活に邪魔^{じやま}になるものは処分してしまい、残ったものを活用して、楽しい生活ができる空間をつくり出した方がよいと考えるのです。空き家は、国や地方の責任で撤去し、跡地^{あとち}を有効に使う方法を考えることが大事だと確信しています。

地方は少子高齢化が進み、高齢者だけが住む社会となったら、それを受け容れ、高齢者が楽しく生きられる空間をつくり出す工夫をした方がよいと考えるに至っています。空き家に住む人を見付けるより、空き家を撤去^{てつきよ}し、空き地を有効に使う方法を考えた方がよい気がするのです。

人口減少や少子高齢化を阻止することに力を注ぐのではなく、人口減少や少子高齢化社会を受け容れて、人口減少、少子高齢化社会をどのようにして楽しむかということ考えた方がよいのではないかという考え方は、絶えず変わりゆく世の中の状況を受け容れて、変化する世の中に合わせた生き方を変えた方がよいのではないか、という考え方なのです。後ろを向いているより、前を向いた生き方をした方がよいと考えているのです。

具体的に言いますと、誰もいらぬ土地・建物などのうち、まわりの人の生活に邪魔^{じやま}になるものは、国がその費用を出して撤去すべきです。国

には、そのような予算はないという人もいるでしょうが、軍事費に使う金があれば、こんな費用は簡単に出せる筈です。抜本的、つまり根本となる原因をとりきる工夫をすることが不可欠です。軍事費に金を使うことができるなら、空き家問題を解決することなど簡単にできる筈です。

そもそも、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と憲法は明文で定めているのに、世界でも上位に入る戦力を持ち、なおそれを増やそうとしている軍事費は、なくさなければならないのです。軍事費を空き家の処理や、人の生活を邪魔している建物などの撤去費用にあてれば、人の生活に邪魔となっている建物の撤去など簡単にできる筈です。

誰もいらぬ土地や建物が、こんなに急激に増えたのは、政治の責任です。政策のミスです。先の見通しの悪い政策の結果です。日本列島改造論などと言う政策の見通しの甘さによる結果なのです。空き家問題と誰もいらぬ遺産問題は、国が責任を持って解決しなければならないのです。個人に責任を負担させるべきではないのです。

高速移動手段で、都会と地方を結べば、地方は活性化するなどという見通しは、間違っていたのです。地方から都会へ出る者は増えましたが、都会から地方に入る人は減ったのです。田舎の小さな病院で診てもらいより、高速移動機関を利用して都会へ出て、検査、診察を受けた方がよいということになり、田舎の医院ははやらなくなったのです。医院だけではありません。衣料品屋もその他の商売も同じです。地方は活性化するどころか、どんどん過疎化してしまっただけです。頭の悪い政治家や官僚がやったことです。



「誰もいらぬ遺産問題」も「空き家問題」もその解決方法は、国に任せ、国の責任でいい方法を考えてもらうことにして、人口減少、少子高齢化社会となっている地方に住む老人としては、残された人生をどう楽しむかを考えたいのです。

つまり、人口減少も、少子高齢化社会も、誰もいらぬ遺産問題も、空き家問題も、それはそれとして受け容れて、人口の少ない、年寄りの多い地方をどのようにして、パラダイス、つまり、楽しさの満ちあふれている

楽園らくえんにするかを考えるべきだという思いに至っています。



地方をどのようにして人口を増やし、若者を増やし、土地や建物が欲しいという人を増やして、「誰もいらない遺産問題」と「空き家問題」を解決しようとしても、それは無理な気がします。そんな妙案みょうあんは浮かびません。

考え方を切り替えて、それはそれとして、人口減少、少子高齢化社会を受け容れ、その上で、人口減少、少子高齢化社会の中で、どのようにして楽しい人生を送れるかを考えてみる必要があると言う思いに至っています。後ろを向いているより、前を向いて生きた方がいいということです。人口が減り、年寄りの多い田舎をどのようにしてパラダイスにするかを考えた方がいいという考えに至っています。

『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『田舎弁護士いなべんの哲学』を提唱ていしょうしている身としては、人口が減少しようと、少子高齢化社会になろうと、その時々ときどきの社会状況の中で「いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くせばよい」という結論になるのです。

「誰もいらない遺産問題」も「空き家問題」も、その時々ときどきの状況に応じて、その時一番よいと思う方法を取ればいいのです。その問題に関係する人達の仲を取り持ち、円満相続、円満解決をさせてあげられるような弁護士となって、自分もまわりの人も、楽しく生きられるようにしてあげられるような弁護士になりたいと思います。

このように考えますと、「誰もいらない遺産問題」も「空き家問題」も、前向きに対応することができそうです。ギアはバックギアではなく、前進ギアに入れたいものです。

「誰もいらない遺産問題」と、「空き家問題」は、まずそのような状況を現実として受け容れ、そういう現実をどのような方向に進めていくのかハンドルの切り方を政府はしっかりやってほしいのです。私達国民も一人一人ひとりひとりが相応そうおうの責任を感じ、この問題を受け容れて、前向きまへむきの解決に協力しなければならぬのです。